慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エドマンド・ホイッテーカー著 経済観念史
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.11 (1940. 11) ,p.2179(85)- 2191(97)
JaLC DOI	10.14991/001.19401101-0085
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19401101-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エドマンド・ホイッテーカー著『經濟觀念史』

高橋誠一郎

一

吾人が玆に紹介せんとするものは、米國イリノイヅ大學經濟學准教授エドマンド・ホイッテーカー氏が本年、書肆ロングマン・グリーン商會より出版せる『經濟觀念史』(A History of Economic Ideas, 1940.)である。

著者は彼れの所謂經濟思想史研究の二方法、即ち年代學的及び觀念學的の兩者中、前者を避けて、後者を採るものである。蓋し、あらゆる時期は多様なる觀念を有するものであつて、是れ等のものは互に相撞着することが屢々であり、且つ唯り是れ等のもの自體の發達に徴してのみ了解せられ得るものと觀るが故である。(p. vii.)。著者は章を分つこと十六、第一「社會進化と社會思想」、第二「富と人間の勤勞」、第三「經濟的個人主義」、第四「財産と富の分配」、第五「社會改革運動」、第六「經濟的國民主義」、第七「人口」、第八「生産」、第九「價値」、第十「地代」、第十一「利子」、第十二「賃銀」、第十三「利潤」、第十四「貨幣」、第十五「好景氣と不景氣」第十六「經濟學の對象と方法」とが是れであり、更らに之れに「回想」及び「參考書目」を加へてゐる。索引をも合する時は實に七百六十六頁に及ぶ尨大なる著作である。

エドマンド・ホイッテーカー著『經濟觀念史』

二

人間の觀念の進化が社會制度の進化を支配するか、若しくは又、思想が其れ自體社會的環境——而して特に經濟的環境によつて說明せらるゝか。本書の著者は、ヘーゲル及びマルクスによつて代表せらるゝ是れ等極端に走するの嫌ひある兩理論の孰れをも支持することなくして、唯だ單に諸觀念と人々の生くる諸條件との間に明白なる關係の存することを認め、而して、本書の全般を通じて是れ等兩者間の關係を强調せんことを期するものである。而して、彼れは先づ劈頭の第一章に於いて、以下細目に亙れる諸研究が適合せしめられ得る社會史及び社會思想の背景を與へんことを企圖する。彼れを以つて觀れば、是れ迄、リスト、ヒルデブラント、モルガン、ビュッヒャー等の諸學者によつて行はれた諸段階の連續として社會史を叙述するによつて之れを約說し單純化せんとする幾多の企圖が存して居つたのであるが、而も、人間進化の經路は這般の方法に於いて十分に描寫せらるゝには餘りに複雜であつたことを承認せざるを得ない。「歷史は經濟的及び其の他の諸要素の合成物である」。（p. 6.）。

古代希臘及び羅馬哲學者中の或る者並びに後世の社會契約論者其の他は原始生活の基礎を以つて個人主義的なりと觀る。かの羅馬人ルクレチウスの哲學詩 De rerum natura. 英國の政治哲學者トーマス・ホッブズ の Leviathan 及びビュッヒャーの Die Entstehung der Volkswirtschaft. の如きは孰れも斯くの如く主張するものではあるが、而も、本書の著者は、原始民の間に於ける晩近の探究が這般の見解に挑戰するものと做し、ミリノウスキィ及びファースを引用して、總べての證左が最も幼稚なる文化に於いてすら社會生活の存したる事實を指示する旨を說いてゐる。（pp. 7-10.）。

彼れは社會及び國家成立の諸理論に關して述べたる後、（pp. 11-15.）、古代地中海文明を叙し、族長社會より始めて、希臘の都市國家、アレクザンドロス及び羅馬の帝國、古代世界に於ける社會鬪爭に就いて略記する。（pp. 15-19.）。古代埃及は權威的國家と稱せられ得るものであるが、希臘及び羅馬文明は個人主義に向つて移行し、商工業は發達し　羅馬人の集權的國家の後に、一千年に亙れる封建的分權の中世社會が現れた。中世を通じて偉大なる勢力を振つた基督教會の教旨は環境の變化に應ずるが爲めに絶えず調整せられた。最初は現世的事項に關して永續的政策を築き上げんとする如何なる要求も存することがなかつたのであるが、時の經過と共に組織的教會は存立するに至り、公の承認を受けて、人間行爲の一切に亙つて理想的嚮導原理を與へんことを企圖した。（pp. 19-30.）。次いで著者は封建制度の崩壞、教會權威の衰退、新教運動に就いて述べ、宗教改革を以つて宗教的解釋に於ける個人主義の興起を表示するものと說く。宗教改革は教會の國際的單一性を破壞し、而して其の成功を見たる國々に於いては、宗教組織は民族的國家と結合せしめらるゝことゝ爲つた。近世民族國家の興起は經濟思想及び經濟政策中に反映せられた。普通に「重商主義」として知らるゝものは其の結果である。（pp. 30-39.）。

第十七世紀及び其の以後に於いて、專制主義、人民の經濟活動の國家管理は、英國其の他の國々に於いては、民主主義、個人主義に道を讓つた。近世經濟學の基礎は置かれた。然も、新たなる諸觀念は批判なくして受け容れられることがなかつた。反對說は浪漫主義者、ヘーゲル學徒及び社會主義者の間に起つた。初期の基督教哲學者等と等しく、ロック及びルソーは人々の間に於ける先天的平等の原理を表明した。ヘーゲル及び彼れと同時代の獨逸哲學者等は斯くの如き見解を承認することを拒んだ。獨逸の浪漫主義者フリートリッヒ・フォン・シュレーゲルは印度の種姓制度に好意を寄せ、而して慈善に關する基督教的理想を以つて階級の分岐を是認するものとすら觀じた。人々は不平等であり、社會は指導の地位及び能力を有する個人若しくは集團によつて支配せらるゝものである（若し

くは支配せらる可きものである）と云ふ觀念は一定の著者等によつて發達せしめられた。マルクスによつて組織的に表明せられた階級政治の學說は其の一例である。佛蘭西の宗教史家エルネスト・ルナン、獨逸の哲學者フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ及び伊太利亞の政治哲學者ゲタノ・モスカ及び社會學者・經濟學者ヴィルフレド・パレートは別箇の進路を取つた。彼れ等の意見に據れば、社會的支配に於ける重要なる要素は、マルクスの主張するが如く、經濟的條件ではなくして、人間的品質である。最近の五十年は、英米の如き自由放任主義が廣汎なる承認を受けたる國々に於いてすら、個人主義及び自由放任主義から、何等かの形態に於ける國家規則に向つて移行せんとする顯著なる傾向を示した。個人的自由は害惡によつて伴はれた。社會の要求する一定の貨物若しくは勤務は私企業によつて供給せらるゝことがなかつた。社會的に觀て非難せらる可き欲求は恣に滿された。唯り兒童のみならず、薄弱なる經濟的地位に在る成年すら搾取から自己を防護することが出來なかつた。强大なる獨占は存在を見るに至り、消費者の失費に於いて其の所有者等を富裕ならしめた。斯くて、政府は、一方に於いては個々の生產者等の行爲を取締るが爲めに、又、他方に於ては官營生產を以つて是れ等のものを補充するが爲めに其の步を踏み入れたのである。一千九百十四年より十八年に亙つた世界大戰並びに一千九百二十九年の末に始まる世界的不況は這般の發達に對して大なる刺戟を與へた。（pp. 39-57.）。

三

第二章に入つて、著者は富に對する人間の態度が多大なる變化を示したることを說き、先づ原始民が何等大なる程度に於いて個人的利得に誘はるゝものに非ざることより說き起して、原始生活に於ける諸刺戟物に就いて述べ、文明の發達に伴へる諸欲望の增進を論じ、次いで古代哲學者及び後世に於ける基督敎傳道師等は嚴烈なる態度を以つて富の追求を批判せるも、而も、斯くの如き見解が十分に其の時代の一般的意見を反映するものとは信じ難きことを說く。（pp. 58-83.）。著者は宗敎改革と資本主義の興起に就いて述べたる後、重商主義者等が個人的富を國家の必要と思惟せられたるものに從屬せしめんことを主張したる旨を論ずる。（pp. 83-93.）。

著者は臆がて近世に於ける快樂說の復歸を說き、ベンサムが效用遞減の原理を表明して現代經濟學に對して合理的基礎を供給せることを論ずる。（pp. 95-119.）。次いで、彼れは富に關する古典學派の觀念に對する批判を觀る。マクロウドは、古典派の經濟學者が、權利の如き、貨物にも勤務にも非ざる有價値物件を「富」より排除することを攻擊した。トーマス・カーライル、ジョン・ラスキン、ヘンリイ・デーヴィッド・ソロー等の浪漫主義者及びソーアスタイン・ヴェブレン等の制度主義者は、富の研究が全體としての生活の其れに結合せしめられなければならぬことを主張した。快感及び苦痛理論は心理學者間に於ける其の聲價を減じ、而して個人的心性及び社會的慣習の如き要素は人間の刺戟物として强調せられた。斯くてジェヴォンズの快樂主義は閑却せられ、若しくは全然拋棄せらるゝにすら至つた。彼れの快感及び苦痛の算法は市場によつて測定せらるゝが如き收益及び費用の其れに變形せしめられた。ジェヴォンズの行へるが如く、麵麭の如き、一貨物の連續的單位によつて與へらるゝ快感若しくは效用に於ける漸次的減少と之れを取得するが爲めに必要なる生產的活動より生じつゝある苦痛若しくは不效用の變化を示さんことを企圖せる曲線を引く代りに、經濟學者等は依然として曲線を使用しながらも、彼れ等は人々の感情よりも寧ろ市場の事實を表示することを言した。是れ等經濟學者の集團中に劍橋大學のアルフレッド・マーシャル、米國のエッチ・ジェ・グヴェンポート及び瑞典のグスタッフ・カッセルがある。而も、著者は、最後に、ヴェット・シー・ディッキンソンの行へるが如き古典的心理學の擁護に就いて

一言することを怠つてゐない。(pp. 95-139.)。

第三章に於いて、著者は近世經濟學史を以つて自由放任主義の興隆及び衰退として約說せられ得るものと做し、先づ初期に於ける私利的動機に關する見解より始めて、道學者、一千七百七十六年以前に於ける英國經濟論者、佛國重農主義者、アダム・スミスの經濟學體系に於ける自由放任主義の理論的基礎を觀、經濟的自由主義の實際上收め得たる成功に就いて述べ、而して、理論としての自由放任主義が佛人フレデリック・バスチアの諸著に於いて其の高潮點に到達せることを說く。(pp. 141-158.)。次いで、彼れは自由放任主義の衰頽に移り、スミスすらも政府が一定の經濟的職能を行使せざるを得ざる旨を容認し、後世の著者が漸次其の目錄を擴張したるの事實を述べ、而して、自由放任主義の制度上に於ける衰退に就いて物語り、最後に、這箇干涉主義の大展開が、其の結果の一として、一百年間防禦陣地に置かれた經濟的個人主義をして再び攻撃的地位に立つに至らしめたることを注意する。玆に英國に於ける失業問題の權威サー・ウイリアム・ベッヴァーリッヂ、倫敦大學のライオネル・ロビンズ及び瑞國經濟學者ルートヴィッヒ・フォン・ミーゼスの名が擧げられる。(pp. 158-173.)。

四

第四章に於いては財産及び富の分配が取り扱はれる。「人間の歷史の大なる部分に亙つて、所有權は絕對的且つ個人的ではなく、社會的體制と結紮せられてゐた。權利と義務とは織り合はされてゐた。古代世界に於ける趨勢は所有權を社會的拘束より解放するに向つて居つたが、而も、其の過程は遂に完成せらるゝことなくして、羅馬帝國の崩壞と共に逆轉した。封建の制度は財産關係が至要部分を成す複雜なる組織であつた。第十七世紀及び第十八世紀の西歐に於ける國王專制政治の衰頽に至る迄は、所有權は其の近世的個人主義的性質を享有することがなかつた。更らに近時に於いては反對の方向に赴かんとする顯然たる傾向が存して居つた」。(p. 240.)。著者は種々なる時代に於ける均分主義的主張と之れに對する反對論とを述べ、勞働全收益權を基礎とせる社會主義者の私有財産攻撃及び獨逸哲學者等の財産理論を紹介し、浪漫主義者等が、人格を發達せしめ、個人を社會に結合するに於いて財産によつて演ぜらるゝ役割を強調せることを說き、更らに富の分配に於ける功利主義的見解に及び、土地及び經濟的餘剩の課稅並びに租稅收入よりする私所得に對する政府の補給に就いて述べ、而して近時に於いては課稅及び價格規制が到る所に於いて個人の財産權を限定せることを叙する。(pp. 178-240.)。

第五章は社會改革運動を主題とするものであつて、遠くはプラトーンの共産主義的思想より近くは伊太利亞のファッシズム及び獨逸の國民的社會主義並びに他の諸國に於ける之れに對應する諸傾向に及ぶ。(pp. 242-278.)。第六章に於いては經濟的國民主義が取り扱はれる。古代希臘の昔より領域的自給自足に贊するの主張が存して居り、而して中世は高度の經濟的地方主義を以つて特徵とするものであつたが、近世的國家の興起と共に、中央政府の規制は地方的支配に代り、而して經濟的自給自足の政策は到る處に於いて勵行せられた。然も、個人的富の極大化が社會的目的として承認せらるゝと共に、經濟的國民主義は深刻なる反對を受け得可きものと爲つた。玆に重商主義に對する初期の批評家より、ヒューム、重農學派、ハリス及びスミスに至る意見が窺はれる。然しながら、保護政策は個人的富の見地よりするも猶ほ其の擁護者を有せざるものではなかつた。斯くて著者は近代に於ける保護主義の理論を紹介し、アレグザンダー・ハミルトン、フリートリッヒ・リスト及びジョン・スチュアート・ミルの名と關聯せる幼稚産業保護論並びに內國業務論及び自然的資源保全論に就いて略說し、而して現代に於ける經濟的國民主義の發達に言及する。(pp. 280-318.)。

第七章「人口」に於いては、人口制限を目的とせる蠻民の慣行に筆を起し、古代哲學者、中世神學者及び近世初期に於ける思想家の言說を叙し、所謂政治算術家の行へる研究に及び、次いで、マルサスの先驅者及びマルサス其の人の人口理論に就いて述べ、更らに、マルサスの原理に對するバスチヤ、ケーリー及びヘンリィ・デ・ローデ等の攻撃並びにヘンリィ・シヂウィックによつて其の基礎を與へられた人口に關する最適度理論（the optimum theory of population）及び、より高き生活の標準は出產數を減少すると做すの理論に及び、最後に、最近米國の生物學者レーモンド・パールによつて表明せられた典型的には人口の增進は扁平にして且つ傾斜せるS字型の曲線狀を成すと云ふの說を紹介し、而して、人口問題が其の本質に於いて變化を來し、マルサスの說ける人口過多の危惧は變じて、富と敎育の程度高き社會階級に於ける出生率減退に基く質の低下の憂慮と爲り、更らに出生の減退が下層社會階級にも及んだが爲めに、玆に質の問題は其の重要性を減少して、種々なる國民の間に於ける出生率の相違に由る出生減退國に於ける人口過少の恐怖と化せることを强調する。（pp. 320-358.）。

五

第八章に入つて、著者は生產を主題とし、「如何なる職業が人的努力の究竟目的に適するか」の問題に對する古代哲學者、敎會諸學者及び重商主義者等の意見を述べ、次いで「如何なる業務が生產的として類別せらるゝを得るか」の問題に對して近世經濟學者等の與へたる解答を叙し、第三に「如何なるものが生產の要素と看做さる可きか」の問題に對する諸家の所論を紹介し、最後に、收益法則に論及し、收益遞減原理、收益遞增原理、及び兩原理間の關係に就いて學說史的考察を與へる。彼れは、是れ等の法則の靜的及び動的方面が區別せられ、而して是れ等のものが曾だに土地に對する勞働及び資本の比率に適用せられ得るのみならず、工業的設備の大さ及び企業の規模の如き他の諸問題にも亦適用せられ得るに至つたことを指摘する。（pp. 360-403.）。

第九章の主題は價値である。著者は原始社會に於ける交換及び評價に筆を起して、古代希臘哲學者の求めたる價格決定の倫理的基礎及び基督敎神學者の正價概念を說ける後、近世の競爭價格理論に入る。最初の競爭價格理論は市場の供給及び需要に基礎を置いたのであるが、而も、玆がて表面的說明を以つて滿足することのない著者等は生產條件に解答を求めた。斯くて、カンチロン及びアダム・スミスの生產費說は生じた。次いで著者はロックよりリカードオを經て、マルクスに至る勞働價値學說發達の跡を尋ね、轉じて、資本を以つて過去の勞働に歸することなく、利子を以つて制欲に對する支拂と看做して勞働說より離れたるシィニィオア及びジェ・エス・ミルの生產費說を解說し、古典的國際價値理論に觸れ、更らに限界效用說の發生及び發展を說き、マーシャルの綜合的理論、「供給曲線の反轉し得ること」を認めて、依然效用の主位を主張する墺太利學派及びウィックスチードの學說及びレオン・ワルラスに遡り得る數理的均衡理論並びに限界學說に對する批判的學說に就いて物語る。著者は更らに獨占を論じ、初期の獨占的地位より始めて、經濟學者が自由競爭の普遍的に非ざることを感知し、次第に大なる注意を長期及び短期の獨占的狀態に拂ひつゝあつた事實を述べ、次いで限界理論を擴張して所謂不完全競爭をも包含せんとする企圖の行はれたることを說く。然も、社會は次第に、競爭的なると獨占的なるとを問はず、市場の作用に對して不滿を示し、政府の規制が重要の地位を占むることゝ爲つた。斯くて著者は價格統制に就いて再論し、最後に集產主義經濟に於ける價値の問題を取り扱ふ。（pp. 405-486.）。

第十章に於いては、初期の社會に於ける土地、封建時代より始まる土地制度の進化、商的土地貸出の起源及び第十七八世紀に於ける地代に就いて述べたる後、近代的地代理論に論入し、リカードオ地代說の出現と之れに對する

攻撃とを說き、而して輓近に於ける地代制規に及ぶ。(pp. 487-515.)。第十一章に於いては、古代及び中世に於ける反利子思想、宗教改革の影響、中世以後に於ける利子規制、搾取說・貨幣に對する需要供給說・資本の供給即ち待時說等の近代利子學說、資本の供給曲線の形態、長期及び短期の利子、シュンペーター及びケーンズの學說等に就いて述べる。(pp. 516-564.)。

第十二章に於いては、奴隷及び隷民、並びに中世社會組織崩壞以後に於ける自由勞働市場の進化に就いて略述せる後、貨銀の一般率に關する諸理論を取り扱ひ、逐次生存費說・貨銀基金說・殘差說・限界生產力說を論じ、次いで差別貨銀理論に入り、カンチロン、ハリス及びスミス、リカードオ及びマルクス、シニィオア及びミル、ロングフィールド及びケアンズの見解を紹介し、最後に現代に於ける慣習及び官憲によつて規制せらるゝ貨銀に就いて一言する。(pp. 566-607.)。第十三章に於いては、企業所得を其の構成部分に分析せんとする企圖より筆を進めて、利潤に對する諸學者の意見を考察し、餘剩說及び危險報償說を觀、而して最近に於ける企業の公規制及び利潤の統制に及ぶ。(pp. 608-627.)。

六

第十四章は貨幣を主題とするものであつて、著者は先づ古代社會に於ける貨幣及び銀行　中世の貨幣問題、通貨の改惡、西領亞米利加よりの貴金屬流入、物價の騰貴、數量說の出現、重商主義的貨幣理論、數量說の適用に據る貿易均衡論の擊破、ジョン・ロー等の發券銀行設立の提案　第十七世紀末に於ける平價切下げ論者と原位復舊論者との間の論爭に就いて述べ、而して、一定の近代的學說の基礎が置かれたナポレオン戰役時代に於ける通貨問題の討究に言及する。リカードオは正貨の價値に對しては其の勞働價値說を適用したが、不換紙幣價値の說明に關しては單に數量のみを見た。ヘンリイ・ソーントン等は地方銀行の手形發行と通貨價値下落との間の關係及び不換紙幣增發下に於ける外國爲替の問題に關して重要なる寄與を爲した。著者は進んで、一千八百二十一年以後に於ける貨幣理論を檢討し、貨幣價値に關する生產費說、一千八百四十四年に於ける英蘭銀行組織並びに發券制度改革問題と關聯せる通貨主義と銀行主義との論爭、銀行信用の重要性增加、正金と物價との間の關係に就いてサー・ロバート・ギッフェン及びヘンリイ・シヂウィックの拂へる注意、アーヴィング・フィッシャの數量方程式、一千九百十四年以後に於ける爲替相場理論、貨幣價値に關する限界效用理論並びにクナップの貨幣國定理論及び權威的通貨規制原理に就いて述べる。最後に、著者は、價格水準に著しき變化を生じたる時代に於いて、斯くの如き變化が富の分配に及ぼす影響に就いて注意を喚起したる事實を叙し、而して之れに對して提唱せられたる救濟策を類別して、價格を安定ならしむることを企圖するものと、契約をして價格の變動に適合せしむることを企圖するものとの二種と做してゐる。(pp. 628-683.)。

第十五章は不景氣の歷史に始まる。經濟史家は不景氣が早く第十六七世紀に於いて英國に現れたことを說いてはゐるが、而も斯くの如き初期の暴落が果して那邊まで近代的景氣循環の性質を具有するものであるかを決定す可き證左は不充分である。然しながら、明かに周期的好況及び不況と稱せらる可きもの丶記錄は少くとも第十八世紀にまで遡り得るものである。第十七八世紀の經濟論者は或ひは貨幣多ければ業務活潑と爲ると觀、或ひは貨幣多ければ利子低下すると做し、又或ひは利子低くければ、業務活潑と爲ると說いた。著者は重商主義者以後の貨幣理論及び政策を擧示し、茲にヒューム、ソーントン、グヌート・ヴィクゼル、フォン・ハイエック、ケーンズ及びアール・ヂィ・ホートリー等の貢獻を說く。貨幣の角度より景氣循環を說明せんとするものに對して主たる競爭者の地位に立

つものは消費過少説である。古くはシスモンディ、オーエン及びマルサス、並びにロードベルトス及びマルクス等より近くはホブソン、フォスター及びキャッチング並びにダグラスの名が玆に擧げられる。ケーンズによつて表明せられた貨幣的説明は消費過少の觀念と一定の結合を成すものである。著者は尙ほ企業家心理學及び企業豫測の困難よりする説明に就き一言して此の章を終る。（pp. 685-713.）。

最後の第十六章は經濟學の主旨及び方法を取り扱ふものである。著者は先づアリストテレース、中世神學者、重商主義者、官房學者及び政治算術家の著作に現れたる經濟學より始めて、個人的富の學としての經濟學に就いて觀る。玆にホッブズ、ヒューム、カンチロン、重農學派、古典學派及び新古典學派の方法を檢討して、歷史學派及び制度主義者に移り、獨逸歷史學派の擡頭以前に於ける歷史的見解より始めて、獨逸學派及び制度主義者を論ずる。著者は晩近に於ける國民的經濟學の力强き復活、「新重商主義」の歐洲大戰以後、殊に又、一千九百三十年以後に於ける强化を力説する。「國民的經濟學――是れに由つてスミス及びジェヴォンズの個人主義的經濟學より判然區別せらるゝ底の國民的目的を達成する手段の完成を意味する――は前面に進んだ」と。（pp. 715-743.）。

七

種々なる社會的背景の前に躍る種々なる經濟思想の本質に對する著者の觀察は必ずしも深遂なりと言ふを得ない。諸學派の企圖せる究竟目的及び諸學説の有する眞意義に就いては著者と意見を異にするものが必ずしも無しとしない。古代より中世を經て近世に及ぶ經濟文獻の涉獵に就いては多くの敬意を表す可きものがない。彼れが所謂年代學的方法を棄てゝ、觀念學的方法を採つたが爲めに、一時代の諸觀念が全體として考察せられざるの憾みなきを得ざるのみならず、例へば「財産及び富の分配」と「社會改革運動」、「貨幣」と「景氣變動」と云ふが如き極めて密接なる關係を有するものすら別箇に論述せられたが爲めに、往々にして反復重言の弊に陷るか、然らずんば説いて足らざるの謗なしとしない。而も吾人は著者が現代人の眼に新奇なるの觀ある幾多の觀念の極めて舊き存在なることを明かにし、古代思想より最近の學説に至る連系を表示し得たることを深く悦ばざるを得ない。殊に吾人が怠慢にして注意することのなかつた幾多現代經濟學者の著作が可成りに多く本書中に擧示せられて、多大なる研究の便宜を與へつゝあるの點に於いて感謝の大なるものがある。

（三越洋書部賣價金十八圓）